

山本健吉 編

夏目漱石

吾輩は猫である

カラグラフィック
学研版
明治の古典
全10巻

1 円朝・黙阿弥
怪談牡丹燈籠
天衣紛上野初花
井上ひさし訳

2 尾崎紅葉
金色夜叉
森 敦訳

3 樋口一葉
たけくらべ
にぎりえ
円地文子
田中澄江 訳

4 泉 鏡花
高野聖
歌行燈
秦恒平訳編

5 徳富蘆花
不如帰
澤野久雄訳

6 島崎藤村
若菜集
春
伊藤信吉編

7 独歩・四迷
武蔵野
平凡
篠田一士編

8 森 鷗外
雁
阿部一族
井上 靖編

9 夏目漱石
吾輩は猫である
山本健吉編

10 晶子・敏
白秋・啄木
明治の詩歌
谷川俊太郎編

カラグラフィック
明治の古典 9

吾輩は猫である
山本健吉編

一九八二年九月十六日 第二次 第一刷発行

定価 二、四〇〇円

発行人 鈴木泰二

発行所 学研（株式会社）学習研究社
〒四四五 東京都大田区上池台四丁目四〇番五号
電話 東京（〇三）七二〇一一二（大代表）
振替 東京八一四二九三〇

印刷所 日本写真印刷株式会社

用紙 廣済堂印刷株式会社

三菱製紙株式会社

王子製紙株式会社

製本所 和田製本工業株式会社

製函所 凸版印刷株式会社（包材事業部）

※この本の内容・製本などに関するお問い合わせは、左記あてにお願いします。

文書は（〒一四五）東京都大田区上池台四丁目四〇番五号

学研お客さま相談センター「明治の古典」係

電話は 東京（〇三）七二〇一一二（大代表）

© GAKKEN 一九八一

本書内容の無断転載・複写を禁ず

夏目漱石

吾輩は猫である

山本健吉 編

吾輩は猫である

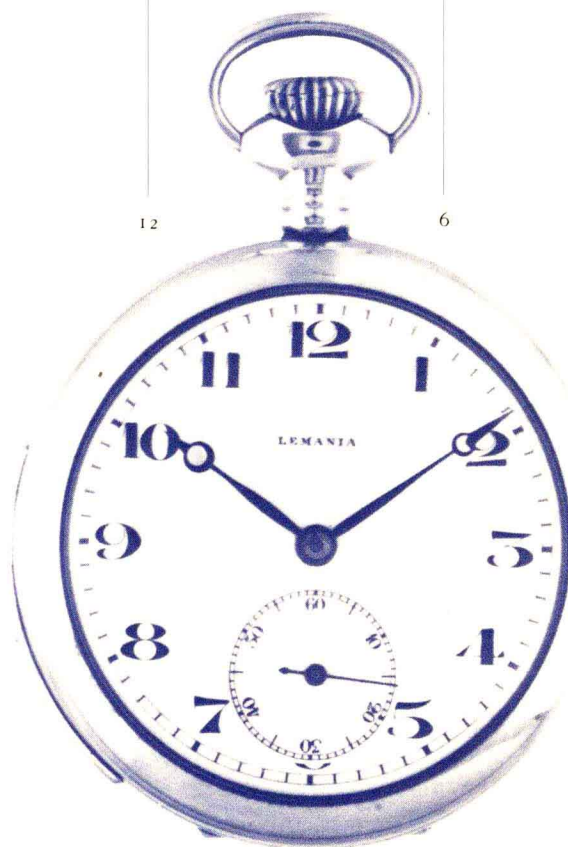
エヘン笑ってくれたまえ。二十世紀に生きるこのアワレでコツケイ
な人間どもを——。迷亭、寒月、独仙など、苦沙弥郎に集まる明治
のヘンなエリートたちを通して、深く苦しみに満ちた人間洞察と、
いまなお新しい文明批評を、笑いにとかしこんだ漱石文学の傑作。

倫敦塔

首斬り役人の低いうた声、ふれれば血のしたたるような恨みの文字。
「宿世の夢の焦点」倫敦塔に漱石の見たものは——。英文学者漱石の
広い知識と美意識が英国の悲劇の歴史を珠玉のロマンに結晶。



102



12

6

注釈 井上百合子
写真 柳沢 信

夢十夜

夢は遠く生の根源へと遡り、無意識のおそれや、満たされることのない憧れを描きだす。かなしくも美しい十の物語のなかに――。

126

特集口絵 漱石・初版本の装幀
評 伝 夏目漱石 ― 小さな肖像画 匠 秀夫 150

解 説 漱石の作品世界 山本健吉 164

エッセイ 「猫」と私の浅からぬ縁 飯沢 匡 168

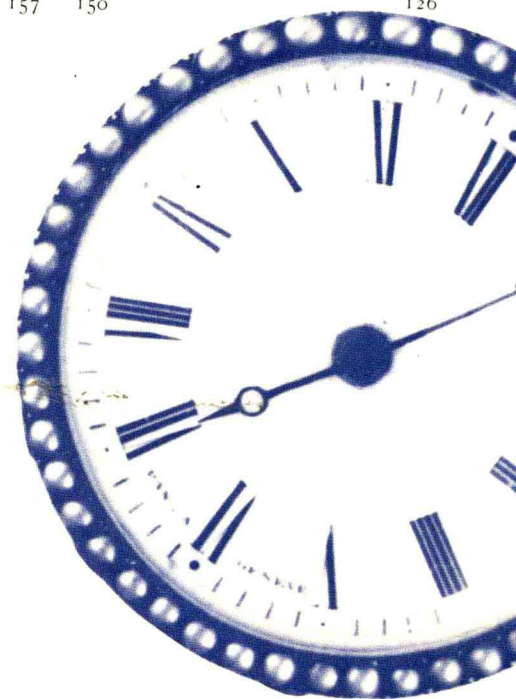
エッセイ 天下一品の面白さ 田辺聖子 170

文学風土記 夏目漱石 大河内昭爾 174

作品小事典 年 譜 井上百合子 172
井上百合子 178

書簡(抄)

ドーモ人間ハ生キタイ為ニ (明治36年7月3日付・菅虎雄宛) 41
只きれいにうつくしく暮らす (明治39年10月26日付・鈴木三重吉宛) 53
御存じの如く僕は (明治39年10月23日付・狩野亨吉宛) 57
拝啓昨二十日夜十時頃 (明治44年2月21日付・福原鏐二郎宛) 71
私はもう画を切り上げやう (大正2年6月11日付・津田青楓宛) 87
私のは画といふよりも (大正2年11月30日付・門間春雄宛) 87
私は生涯に一枚でいゝから (大正2年12月8日付・津田青楓宛) 87
私が生よりも死を択ぶといふのを (大正3年11月14日付・林原耕三宛) 95
此手紙をもう一本君等に上げます (大正5年8月24日付・芥川龍之介 久米正雄宛) 101



(50音順)

井上 靖
田 地 文 子
尾崎秀樹
山本健吉

編集委員

■執筆者

山本健吉（文芸評論家）

飯沢匡（劇作家）

井上百合子（日本女子大学教授）

大河内昭爾（武蔵野女子大学教授）

斎藤茂太（随筆家・精神科医）

匠秀夫（神奈川県立近代美術館館長）

田辺聖子（作家）

三宅正太郎（美術評論家）（50音順）

■写真取材協力・提供

足立美術館 厳島神社 茨城県立美術館 茨木陽介 永青文庫 M O A 美術館 鷗外記念本郷図書館 大林正彦 岡本太郎 小又幸井 亀山利子 ギャラリームカイ 京都市美術館 熊谷秀子 久留米・石橋美術館 小出重子 小宮恒子 佐藤亮一 慈照寺 至文堂 松竹大谷図書館 書道博物館 白瀧弥彦 鈴木萬理 須田寛 セイコー時計資料館 瀬川弘悦 千人社 高松次郎 竹内園 たばこと塩の博物館 東京芸術大学 東京国立博物館 東京都近代文学博物館 夏目純一 日本近代文学館 日本美術家連盟 野々上慶一 P P S 通信社 藤島綾子 ブリヂストン美術館 平凡社 便利堂 松井昌 光村推古書院 目黒雅叙園 野球体育博物館 柳沢真次郎 山田肇 横山隆 吉村縫子 ルーブル美術館（50音順）

■撮影

柳沢信 榊原和夫 高橋敏 小平忠生
小塩寿夫 大隅隆章 原耕平 杉本保夫

■装幀

奥野玲子

■A D

奥野玲子

■レイアウト

アール・グラフィース

■イラスト

佐野洋子

■編集スタッフ

（編集） 星瑠璃子 宮下襄 有働義彦 斎藤正憲
岡部佳子
（校正） 河本久慧

■図版指導

匠秀夫 木村利行

■写真取材

佐藤嘉孝 平林彰

■造本管理

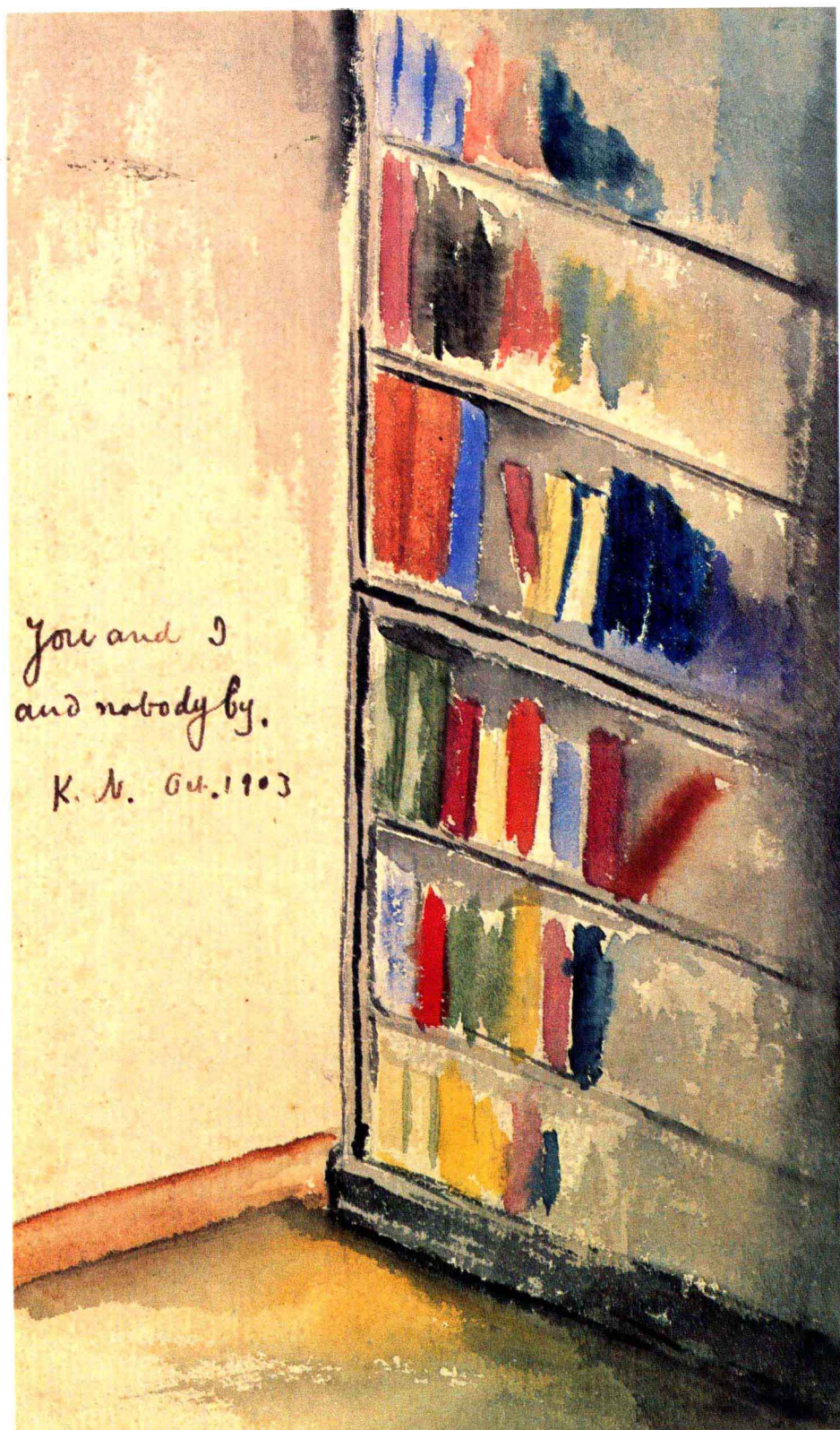
酒寄照男 野口元 北川昇

*掲載いたしました関連資料のうち判明いたしました著作権者及び所蔵者の了解は、可能なかぎりいただきましたが、万一手落ちがございましたら、編集部までご連絡下さい。

五口車は猫である

山本健吉 編





書架図 漱石画 明治36年。初期の水彩画で画中賛の英文は〈君とわれ かたわらに人もなし〉

野間眞綱宛（推定） 漱石自筆水彩絵葉書 明治38年頃 海外生活の印象を物語風に描いたものが、男女のもの思う姿がロマンチックで美しい。



橋口清宛漱石自筆水彩絵葉書 明治38年。橋口清は〈吾輩は猫である〉初版本の装幀者。ほぼ一色の処理だが林の奥行に不思議な存在感が。





人の画師は何を写したものであろうか
を思ふに僕はあつちをよむに付いたものさ

夫の遠くを遠く送るべくてすへきせうに
後へ福国一えつのはまは住と思ふ、水

野おろき木 柿と林檎を色にせむ
何うおつて来ぬとて希望なり

りちや未練を叫ぶ三木
主月道心に冷えし田舎

はひは糸へ移る杖もなく
元々とし思ふ、さよ

僧堂と焚印のあつた
門を去つては極うつ

今に外花をけるさう
輝かたをあげます

しん

野間真綱宛漱石自筆水彩絵葉書 明治37年。真綱は漱石の門下生で俳句をよくし、号は「奇瓢」。絵は秋の花で左肩の月が利いている。

橋口貢宛漱石自筆水彩絵葉書 明治37年。貢の絵葉書に対する礼状。漱石はこの他にも髪を長くたらしめた女性をいくつか描いている。漱石のあこがれの女性像か。



にやふい致あうわい、
是はまづい方の傑作
故に挨拶として送呈わい
(印)

吾輩は猫である



漱石と十一弟子

青楓堂



猫であるは吾輩である

吾輩は猫である。名前はまだない。
どこで生まれたかとうと見当がつかぬ。なんでも薄暗

いじめじめした所でニャーニャー泣いていたことだけは
記憶している。吾輩はここではじめて人間というものを
見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中でい
ちばん簞笥な種族であったそうだ。この書生というのは
時々我々をつかまえて煮て食うという話である。しかし
その当時はなんという考えもなかったからべつだん恐ろ
しいとも思わなかった。ただ彼の手のひらにのせられて

*書生 明治から大正へかけて、ほ
ぼ今の「学生」の意味で「書生」
という語が用いられた。坪内逍遙
の『当世書生気質』（明18-19）の
例がある。また他家に食客となっ
て、雑用を足しながら勉強する青
年をいうが、ここはその意味。



スーと持ち上げられた時なんかフワフワした感じがあ
ったばかりである。手のひらの上で少し落ちついて書生
の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始めであろ
う。この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。
第一毛をもって装飾されべきはすの顔がつるつるしてま
るで薬罐だ。その後猫にもだいが会ったがこんな片輪に
は一度も出くわしたことがない。のみならず顔のまん中
があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々
ぷうぷうと煙を吹く。どうもむせぼくてじつに弱った。
これが人間の飲む煙草というものであることをようやく
このごろ知った。

この書生の手のひらのうちでしばらくはよい心持ちに
すわっておったが、しばらくすると非常な速力で運転し
始めた。書生が動くのか自分だけが動くのかわからない
がむやみに目が回る。胸が悪くなる。とうてい助からな
いと思っていると、どさりと音がして目から火が出た。
それまでは記憶しているがあとはなんのことやらいくら
考えだそうとしてもわからない。

ふと気がついてみると書生はいない。たくさんおった
兄弟が一匹も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠してしまっ
た。その上今までの所とは違ってむやみに明るい。目を
明いていられぬくらいだ。はてななんでも様子がおかし
いと、のそのそはい出してみると非常に痛い。吾輩は藁
の上から急に笹原の中へ捨てられたのである。

ようやくの思いで笹原をはい出すと向こうに大きな池
がある。吾輩は池の前にすわってどうしたらよからうと
考えてみた。べつにこれという分別も出ない。しばらく
して泣いたら書生がまた迎いに来てくれるかと考えつい



た。ニャー、ニャーと試みにやってみたがだれも来な
い。

そのうち池の上をさらさらと風が渡って日が暮れかか
る。腹が非常に減ってきた。泣きたくても声が出ない。しか
たがない、なんでもよいから食い物のある所まで歩こう
と決心をしてそろりそろりと池を左に回り始めた。どう
も非常に苦しい。そこを我慢して無理やりにはって行く
とようやくのことでなんとなく人間臭い所へ出た。ここ
へはいったら、どうにかなると思ってた竹垣のくずれた穴
から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので
もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路
傍に餓死したかもしれんのである。一樹の陰とはよく言
ったものだ。この垣根の穴は今日に至るまで吾輩が隣家

*装飾されべき 普通は「装飾され
るべき」あるいは「装飾さるべき」
と書く。漱石はときどき普通は終
止形につく「べし」（ラ変は連体）
を下二段活用で連用形につける形
を用いる。

庭園 石井柏亭画『猫』をかけた
千駄木の漱石邸の近くにあった大
田の池を描いている（鷗外記念本
郷図書館蔵）





の三毛^{みけ}を訪問する時の通路になっている。さて屋敷へは忍び込んだもののこれから先どうしていいかわからない。そのうちに暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降ってくるという始末でもう一刻も猶^{やう}予^よができなくなった。

しかたがないからとにかく明るくて暖かそうな方へ方へと歩いて行く。今から考えるとその時はすでに家の内にはいつておったのだ。ここで吾輩^{わが輩}はかの書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇^{そうごう}したのである。第一に会った

*一樹の陰 『説法明眼論』に「宿一樹下汲一河流、一夜同宿、一日夫妻、皆是先世結縁」とあるのが典拠という。謡曲や平家物語に用いられ、見知らぬ他人と同じ木の下に宿るのも前世からの因縁であろうという意味。竹垣の破れ穴から入ったのも、前世からのさだめだという意味。